

特集 特殊部隊と心理戦の最先端

「活字メディア」 荒谷卓 陸自研究本部室長（前特殊作戦群長）
初インタビュー

9・11以後の特殊作戦のトレンド 陸上自衛隊の専門家に聞く「世界の特殊部隊」事情

軍事に留まらない多角的・横断的な活動がますます要求される！

特殊作戦とは何か

特殊部隊、特殊作戦とは何か？ また、世界の特殊部隊はどのように変わっていくこととしているのか？ 陸上自衛隊初の特殊部隊として注目を集める「特殊作戦群」の初代群長を務めた荒谷卓・陸自研究本部第3研究室長に、活字メディアとしては初のインタビューを行なった。

— 今回は、世界の主要国の特殊部隊あるいは特殊作戦というものに関して、お話を伺いたいと思います。まず、そもそも特殊作戦と

— 何なのでしょうか？
「特殊作戦といっても、その国の特殊部隊がそれぞれ違った任務を課されているのかによってまったく違うものになります。正規軍のような、スタンダードな人たちというのはありません」

— 通常の軍事的な作戦に収まらないファクターとは、どういうことでしょうか？
「闘いとは相手に対する自分の意思の強要です。通常の軍事作戦とはどういうものかという、簡単に言えば、物理的な手段で敵の戦



荒谷卓（あらや・たかし）

1等陸佐。1959年秋田県生まれ。東京理科大学を卒業後、陸上自衛隊に入隊。第19普通科連隊（福岡）、調査学校、幹部学校、第39普通科連隊中隊長（弘前）、ドイツ留学（独連邦軍指揮大学）、陸幕防衛部 内局防衛政策課、アメリカ留学（特殊作戦関係）等を経て、2004年3月に編成された陸自初の特殊部隊である「特殊作戦群」の初代群長に就任。現在は陸自研究本部総合研究部第2研究室第3研究室長を務める。陸自きっての特殊作戦の専門家として知られる。

— 映画の影響がもたせませんが、一般にわれわれが特殊部隊の作戦としてイメージするのは、「偵察」「後方攪乱」「テロ対策」などです。具体的には、少数のチームで敵の間近に潜入して破壊工作をしたり、人質をとって立て籠もるテロリストを制圧したり、あるいは今だったらアフガニスタンやイラクで

力を撃滅するということになりす。通常の軍隊、すなわち正規軍の任務とは、そうした物質的戦闘で勝利するというところにほかなりません。

— ですが、特殊作戦というのは、軍事的な戦闘のみを手段として限定しない活動となりす。たとえば、敵の意思力、勢力、影響力の弱体化のため、現地で民衆の人心を獲得する工作のようなことも遂行する。政治的意図が競合し交渉では有効な解決の道筋が見えない状況になれば、相手の領域に潜入して状況解決に有効な情報を収集する。そして、敵の意思を變更または挫折させるための有効な手段を創造し実行する。さらには、望ましい政治環境を継続させるため、きわめて長期間に渡り作戦を継続することになるかもしれない。

— アフガニスタンやイラクを例にとると、軍事介入すべきかどうか検討している段階から特殊作戦は始まり、最終的にその地が政治的に安定するまで続けられます。旧体制を打倒し、変革し、新体制を安定化させる……その一連の政治的プロセスすべてに特殊作戦は関わっているわけです。

— ですから、特殊作戦のミッション期間は、通常の軍事作戦よりもずっと長くなります。特殊部隊は単なるミリタリー・フォースでは

テロ・グループを捜索して急襲したりというようなことですが……。

「もちろんそういった活動も特殊作戦に入ります。けれども、それらは特殊作戦の中で使われるひとつの戦術行動にすぎません。特殊作戦というのは、もともとずっと広い概念のものです」

— その他に特殊作戦といえは、どういったものが含まれるのですか？
「期待される作戦効果に通常の軍事作戦に収まりきれないファクターが含まれているものは、すべてスペシャルなオペレーション、すなわち特殊作戦と言っているかと思えます。

— 精鋭戦闘部隊は特殊部隊の一部
— そうした特殊作戦に携わる部隊を特殊部隊とするなら、それは、歩兵の中から少数精鋭を選抜した、極めて戦闘能力の高いエリート部隊」という定義ではないわけですね？
「人数を基準に特殊部隊と呼ぶわけではありません。たとえば、韓国や北朝鮮は師団級のきわめて大部隊の特殊部隊を持っています。また、戦闘能力だけが要求されているわけではない。やはり目的を達成するための企画能力と実行能力ですなね。

— 通常の軍の場合、歩兵部隊は他の砲兵部隊や機甲部隊なども密接に連携し、全体の一部としての役割を要求されますが、特殊部隊は彼ら自身が独立して作戦を遂行するという特徴があります。

— そういう意味で、戦闘部隊であっても、そういう独立した作戦に投入されることを前提に編成されている部隊も特殊部隊と呼んではいけません。たとえば米軍で言う「レンジャー」と

か、英豪軍で「コマンドウ」と呼ばれる部隊などがそうですね。これらは純粋にミリタリーの組織で、目的も軍事オペレーションの範疇です。敵を襲撃し、施設を破壊する……という目的で動きます。彼らはとくに優れた戦闘技術を持った歩兵の集団として行動します。

とはいえ、コマンドウやレンジャーは特殊部隊全体の中では戦闘機能に特化した部隊ということですね。こうした戦闘部隊は特殊部隊全体の中では、とくに火力戦闘が必要な部分でショート・タイムで使われます。ですが、



イラクの米陸軍第75レンジャー連隊 (Photo/US Army)

SAS (英陸軍特殊空挺部隊) のような部隊が非正規戦全体を企画する特殊作戦そのものは、作戦の仕込みから始まり、効果の継続、戦闘終了後の後々のことまで含みます。つまり、前述したように、特殊作戦とは一般的にきわめてロング・タイムの作戦になるわけですね。

主要国の特殊部隊の多くでは、もちろん軽装備の少人数による戦闘能力も要求されますが、そうした戦闘力以外の多岐にわたる任務が求められています。

「インテリジェンス能力も求められるのではないですか？」

「特殊作戦の最初の段階は情報活動で始まりますし、特殊作戦全体を通じてインテリジェンスは非常に重要です」

「各国の軍の中には、いわゆるインテリジェンスの専門部隊があるところも多いですね。そうすると、特殊部隊とインテリジェンス部隊はどういう関係になるのですか？」

「正規軍のインテリジェンス部隊というのは、通常の軍事作戦に必要な情報収集が目的となります。インテリジェンス部隊が戦闘行動等その他の仕事をするということは基本的にはありません。インテリジェンス部隊はあくまでインテリジェンスの仕事だけをします。

しても、彼らは戦闘能力がないため、タリバンの村のように本当に危ないエリアには入っていないわけですね。

しかし、特殊部隊の場合には、仮にテロリストを探し出して拘束するという任務が与えられたとすれば、特殊部隊自身が核心部まで潜入し、探すところから捕まえるところまで全部を自前でやることとなります。ですから、対テロ戦の現場では、正規軍の情報部隊と特殊部隊の情報部門とを比べると、圧倒的に特殊部隊のほうが深い活動をやっていきます」

「語学も必要になりますね？」

「語学はもう必須ですね。それも単なる語学だけではなく、文化や慣習も理解する必要があります」

「さらにますますインテリジェンス部隊との線引きがわかりづらくなってくるのでは？」

「そうですね。現地での宣伝戦・心理戦も重要ですね。」

「そうですね。米軍の場合も、特殊作戦コマンド(SOCOM)の指揮下に心理戦部隊が組み込まれています」

「心理作戦の場合、心理戦部隊を独立して投入するのですか？ それとも、特殊部隊の現地投入チームの中に心理戦部隊のスペシャ

リストを紛れ込ませるのでしょうか？」

「心理作戦というのは非常に専門性が高く、たとえばメディアへの働きかけとか、敵に対し直接心理的揺さぶりをかけるとか……心理戦の効果の分析まで専門のツールを使用するため、現地のチームに組み込むというよりも、通常、そこは独自の作戦になりますね」

軍隊系と警察系の違い

「ところで、特殊部隊といっても、それぞれの国には軍隊系と警察系の特殊部隊がありますが、その違いとは何でしょうか？」

「根本的な違いは「権限」です。軍隊というのは国際法で国家の自衛権に基づく実力組織として戦闘行為を認められているのに対して、警察に関してはそれぞれの国内法の権限に基づき必要な範囲で実力行使が認められているわけです。その権限は領土内に限定されるのですね。」

「ですから、国家間の特別な協定がある場合を除き、原則的に警察の特殊部隊が国際的なミッションを請け負うということはありません」

「つまり、アフガニスタンやイラクに警察系の特殊部隊が投入されることはない、と？」

ところが特殊部隊の場合は、インテリジェンスの仕事をしながらも、その場で処置が必要な状況に遭遇すれば、速やかに自力で解決します。たとえば「サダム・フセインを見つけた」「オサマ・ビンラディンを見つけた」というような場合に自力で対処するわけですね。そこはインテリジェンス部隊と特殊部隊では決定的に違います」

特殊部隊とインテリジェンス

「特殊部隊はインテリジェンス部隊とは連携するのですか？ たとえばアフガンやイラクでの例はどうでしょうか？」

「正規軍の情報部隊との連携はないと思います。目的が違いますからね。むしろ連携が必要とされるのは、CIAやMI6のような国家情報機関ですね」

「アフガンやイラクで米英などの特殊部隊がやっている活動は、インテリジェンスもたらされたから、さあ特殊部隊が出動せよ」という順序ではなくて、特殊部隊が自ら個別にインテリジェンス活動をやるというかたちですね？」

「特殊作戦に必要な情報を通常の情報部隊が収集するというのは不可能です。たとえばインテリジェンス部隊がヒューミントをやるに

警察を訓練するために外国の警察系特殊部隊の教官が派遣されることはあり得ます」

「ドイツ国境警備隊の対テロ部隊として有名なGSG9、あるいはロシア連邦保安局の特殊部隊のアルファなど、いくつかの国には軍隊と警察の中間的な特殊部隊もあります。何が違うのでしょうか？」

「それらには軍の特殊部隊並みの強力な戦闘力が備わっていますが、任務は治安維持に限定されています。軍事的な任務は課せられていませんし、軍隊のような国際的な活動は正當な活動とは見なされません」

「自国機に対するハイジャック事件などでは国外に出動することもありますが……」

「ハイジャックの場合は、自国の治安維持の延長という解釈になります。つまり、機内は領土の延長で、国内法が適用される警察のテリトリーということですね」

「軍隊系と警察系の特殊部隊では、やはり軍隊系のほうが強力ということになりますか？」

「想定される任務が違いますから、裝備的には一般的には軍隊系のほうが武装のレベルは高いのが当然です。警察系の特殊部隊の任務は、あくまで治安維持ですから、逆に過剰に強力な実力行使をしては比例原則に反する恐れ

れがあります。

警察系は治安対処のための装備は充実していますし、訓練もされています。個人の格闘能力などはむしろ警察系の方が高いでしょう。けれども、アフガニスタンでタリバンとの戦いに対応できるかといえば、そこは無理でしょうね。タリバンはテロリストというよりは軍隊ですから、治安維持の機能だけではとても対応しきれない。アパッチを使ったり、他の部隊と連携したりと、作戦・戦術面の要素が複雑になる。そういう局面では、やはり軍隊系の特殊部隊でないに対応できません。



イラク南部沿海で活動する米海軍SEALとポーランド軍のチーム (Photo/US Navy)

軍隊系と警察系でどちらが強いかとかいう問題ではなく、任務に基づく機能の違いです」

主任務は「対テロ」

「軍隊系の特殊部隊の話に戻りますが、それらの特殊部隊は軍全体のなかでは、どういう位置付けのもとに、こういった部隊が編成されているのですか？」

「これもそれぞれの国によってかなり違います」
——主要国はやはり米軍を手本にしているのですか？」

「いえ、そうとは言えません。圧倒的な軍事予算を持つ米軍の特殊部隊は、世界でもケタ違いに大規模なもので、あれだけの特殊部隊を編成しているのは米軍だけです。米軍の特殊部隊の編成はかなり特別なものであり、政治的バックグラウンドも違いますから、真似のしようがありません。

特殊部隊というのはその国の事情、とくに政治・外交的にどれだけのことが求められるのかということが大きく変わってきますから、先ほど言ったように、スタンダードな私たちというものはありません。イギリスもフランスもドイツもイタリアもオーストラリアも、あるいはロシアも中国も北朝鮮もイスラ

エルも、それぞれ独自の持ち味を持っています。

ただ、イギリス陸軍の特殊部隊SASは、伝統的に少人数での活動、なかでも戦闘力、あるいは情報や心理戦を含めた総合的な能力が高いことで知られています。各国が特殊部隊を編成する場合に、しばしばSASをプロトタイプに作っています」

——世界の主要国の特殊部隊を見て、最近のトレンドとはどんなものですか？」
「ひとつは、テロ対策の分野に主要な活動が集中しつつあることです」

——もう正規戦での特殊偵察だとか後方錯乱だとか破壊工作だとかいったものは、あまり重視されていないと？」

「現在の特殊部隊の主任務は対テロということですね。これはどの国でもほぼ共通しています。ただし、テロとの戦いのなかで正規戦に準じた行動はあり得ます。

今の国際情勢を見れば、どの国も正面きつた戦争の脅威というよりは、テロの脅威というものに直面しています。ですから、政治は当然、対テロを重視する。特殊作戦はポリテikal・オペレーションですから、政治の関心がいけば高い課題にその任務も集中するのです」

「対テロということでは、テロリストを逮捕して捕縛することですね？」

「必ずしも敵地に潜入してテロリスト狩りを行なうということだけではありません。というの、今では対テロ自体の意味が非常に幅広くなってきているからです。

いまや金融、環境、衛生など、多くの分野が対テロ作戦のフィールドになっています。テロとの戦いというのは、社会秩序そのものに関するイデオロギーの戦いです。別な言い方をすれば、テロとの戦いの戦場は、民衆の心の中にあるとも言えます」

通常部隊の特殊部隊化

——他に近年のトレンドといえば、何かありますか？」



アフガニスタンでの功績でシルバースター勲章を授与される米陸軍第10特殊部隊員 (Photo/US Army)

「国際紛争のかたちそのものが、以前のような正規軍の戦闘により勝敗を決する」というかたちには収まらなくなってきています。そのため、非正規戦つまり特殊作戦が、むしろメインになりつつあるのです」
——どういうことでしょうか？」

「たとえば今のイラクやアフガニスタンでの多国軍の活動を見ると、作戦の目的そのものが、安定した政治的秩序の創造」ということになっていきます。こういうことは、もとも特殊作戦の領域です。それを破壊と占領を専門としてきた通常部隊まで投入してやっているということになります。

ですから、もしも十分な兵力さえあれば、特殊部隊がすべてやったほうがうまくいくんだらうと思います。ところが、かなり広範に手を出しているものだから、特殊部隊だけでは手が足りない。そこで通常部隊でカバーできるところは通常部隊にやらせているということですね」

——それらはやはり、9・11以降のトレンドということですか？」

「正規軍の作戦という観点からは、新たなトレンドといえるでしょう。しかし、特殊作戦は第2次世界大戦まで溯っても、やはり特殊だったわけですね。米軍のOSS(戦略サービ

ス室/CIAの前身)や、わが国の中野学校は、ある意味で今以上に政治的で特殊な作戦を遂行していました。

第2次世界大戦後、このような特殊部隊はむしろ情報機関へと変貌を遂げるわけですが、一方で、米軍の特殊部隊がベトナム戦争に際して、ひと味違う動きをするようになるわけです。グリーンベレーなどが民事作戦に乗り出すんですね。たとえば製材会社を設立して、現地の人を雇用する。人心を掴むために、現地で医療や建設、農業などを支援する。そういうことをやるのですが、これは通常部隊の活動としては考えられないことですね。こうして特殊部隊というのは、通常の部隊とはかなり違う「ウラの動き」を独自に行なう部隊だということになった。他の一般の部隊からすると、かなり特異な連中だと見られるようになったわけです。

しかし、それが9・11以降、再び統合されつつあるといえます。その統合の形態というのは逆転ですね。先ほど言ったように、アフガンやイラクの作戦では、特殊作戦に近い作戦に通常部隊が組み込まれています。特殊作戦は影の存在から表の存在へと変わったのです。したがって、特殊部隊が通常部隊をリードしなければならなくなっているわけです」

——主要国の軍隊で特殊部隊は増えているのですか？

「明らかに増えていますね」

——それらの特殊部隊の統括者の地位が向上しているということもあるのですか？

「ほとんどすべての国で、そうなっています。たとえば、米軍の太平洋軍特殊部隊の司令官は最近、星の数がひとつ増えましたね」

——特殊部隊の司令官というと、大佐とか准将クラスの印象があったのですが……

「今は違いますね。米軍の特殊作戦軍の司令官は大将です。つい最近まで米陸軍参謀長だったシユーマー大將も元特殊作戦軍司令官です」

もちろん、こうした人材配置には意味があるのです。通常部隊の任務が、特殊部隊がやるような分野になってきているため、部隊編成から作戦の内容、訓練のやり方まで、特殊部隊的なものに改革しなければならなくなってきたんですね。そのために、特殊部隊を知り尽くした人物が重用されたということなのです」

求められるマルチな能力

——特殊部隊員に求められるスキルも、通常の部隊とは違いますか？

「基本的に政治的情勢判断に基づいて行動を演じていくという点では、通常の歩兵部隊のなかから、体力的に優れ、戦闘力に優れた人材が選別されるという印象だったのですが、これからの特殊部隊はアタマのほうこそ必要だということになりますね」

現場で高度な判断を！

——今までの特殊部隊のイメージでは、その隊員というのは、通常の歩兵部隊のなかから、体力的に優れ、戦闘力に優れた人材が選別されるという印象だったのですが、これからの特殊部隊はアタマのほうこそ必要だということになりますね。

「もともと特殊部隊の選考においては、どの国でも、体力は前提条件で、選抜のポイントにはむしろ柔軟性や適応力、さらに精神的な

「たとえば、いろんな機能が必要とする作戦を遂行するとします。正規軍であれば、歩兵や機甲等の戦闘部隊に加えて工兵部隊がいたり、通信部隊や衛生部隊がいたり、さまざまな機能別部隊が個別に存在します。そうした機能力を全部集めるとなると、結局は師団級のサイズになってしまいます。それだと、ああ堂々の大規模作戦しかできなくなりません」

ですが、対テロ作戦ではしばしば、できるだけ目立たず融通の利く行動が要求されます。とすると、結局は1人でさまざまなことをやらなくてはならないということになる。たとえばイギリスのSASは1チームが4人編成です。たった4人で軍隊+αのすべての機能をこなさなければならぬんですね」

つまり、各隊員が1人でなんでもやれなければならない、と？

「コンピューターや爆破工作等それぞれ専門の分野を持っていたとしても、特殊部隊の隊員ならどの分野に関しても必要な技能は各自が持つていなければなりません。そして、何より大事なのが、そのような多様な技能を各自が作戦目的のため最適なかたちで使いこなせるということです。ここが特殊部隊の隊員と通常部隊の隊員との大きな違いですね」

タフさといったことになりません。どんな状況にも動じない、精神的に安定している人間が求められるのです。そして、それに加えてスマートな判断力・決断力ということになります」

——これからの兵士は、大きな軍隊という組織の中のただの歯車ではやっていけなくなってきたという事ですか？

「その通りです。たとえば、テロとの戦いで、ひとつひとつの戦いに、もはや師団や軍団などが投入されるという局面はありません。それぞれその局面で、その現場にいる部隊の指揮官が瞬時にどう判断するかということがきわめて重要なんです」

現場の指揮官といえば、小隊長クラスですか？

「場合によっては中隊長くらいまで出ているかもしれませんが、少なくとも師団長とか連隊長とかいうレベルではありません。すると大尉や少佐クラスの現場部隊指揮官が、従来は師団長クラスが判断していたようなことを判断し、実行しなければならぬわけですね」

かつては、たとえばこのエリアを制圧せよ、との命令があれば、部隊はその目的に向かって効率的な軍事行動をしていたわけですが、今では、それぞれ小隊長レベルが、

——チームを組むときに、ある分野の専門家と、別の分野の専門家と、さらに別の分野の専門家を集めてチーム編成するというやり方はとれないのですか？

「少人数のチームで重要なのは、互いの連携と信頼感です。ですから、そういった即席のチーム編成というのは、どこの特殊部隊もあまりとりません。それよりも、マルチな能力を身につけられる人材を選抜し、徹底した訓練で日頃から互いに阿吽の呼吸で動けるようにしておくということが重視されています」

現場での判断力も求められますね？

「そこも他の普通の部隊と大きく違うところですね。普通の軍事作戦の場合、末端の兵士は、示されたプランに沿って動いていきます。そのプランを統制し修正するのは指揮官の仕事です。下にいけばいくほど、考える余地は少なくなります」

ところが、特殊作戦の場合は全員が指揮官と同じように現場で判断しなければならぬことが多くなります。計画は精密に創り上げますが、状況は常に変化し、すべて予定通りにいくことなどほとんどありません。ですから、状況の変化に合わせて各自が自分の確信に判断し、行動しなければならぬのです。この小部隊のリーダーはジェネラルと同じ

「これ以上やったら政治問題になるかもしれない」などという判断を、それぞれやらなければいけないということですね。

「そういうことです。ミャンマーでの日本人カメラマンの射殺の例がまさにそうです。射殺した兵士は自分のとった行為がこんなに大きな政治的影響を及ぼすとは思っていませんでした。ですから、「撃つと言われたから撃ちました」などと言う兵士は、もう紛争現場に連れていってはいけないわけです。なぜなら、彼らの軽率な行為は、即座にメディアによって報道され、作戦の正当性を喪失させ、民心を離反させることに直結するからです」

——兵士個人の判断力が要求されるとのことですが、今、主要国の軍のなかで、特殊部隊の比率が増えていますよね。そうすると、これまでエリート部隊だった特殊部隊の精鋭度の低下、質の低下というものが出てくるのではないですか？

「それが今の特殊部隊の課題です。たとえば一般のアメリカのQDR（4年毎の国防計画見直し）では「特殊部隊を33パーセント増やす」とされましたが、これに特殊部隊側は反対しています。現状のサイズ維持でも質的に一杯一杯なのに、質を落とさないでもっと増や



インドネシア軍に技術支援をする米太平洋軍特殊作戦コマンドの隊員 (Photo/DoD)

すというのは困難だというわけですが、そこでもう軍隊の中からだけ人材を集めていたのでは追いつかないと、一般市民からの直接的なリクルートがすでに始まっています」

これからの特殊部隊

「今後、正規軍同士の正規戦という局面はあまり考えられません。そういう状況で、将来的に主要国の特殊部隊はどうなっていくと考えますか？」

「その特殊性の質が変わってくると考えています。今後、特殊部隊はますます軍事以外のファクターを作戰に取り入れていかざるを得ないでしょう。」

たとえばアフガニスタンのISAFの活動などを見てもそうですが、もはや軍事だけではなく政治機能の多分野にわたる横断的な活



私服で行動するイラクの米特殊部隊員 (Photo/DoD)

動が要求されています。いわゆるインター・エージェンシーや軍民協力ですね。軍事、外交、経済、厚生、環境等、そういったものをパッケージでやらないと、民衆の心を掴むことはできません。ある場所で作戰をする場合、まず軍事作戰をやってから、というプロセスをとると、そこで民心が離れてしまいます。軍事作戰と民生安定化は同時並行でやらなければならぬのです。」

そこでインター・エージェンシーの活動が必要とされるわけですが、それが現状の縦割り行政組織間の調整作業でやっていたのでは要求される作戰テンポに適應できない。したがって、それに携わる人間としては、軍事の能力に加えて、外交、経済、金融、環境といったマルチ・タレントを持った人材が要求されます。つまり、インター・エージェンシーの活動を個人で遂行できるマルチ・スパー・プレイヤーこそが、これからの新しい特殊部隊で要求される人材じゃないかと思えます。」

「お話を聞けば聞くほど、ますますインテリジェンスが重要になっていくように思えます。そのとおりです。まず何をやるにしても情報です。経済にしろ金融にしろ環境にしろ、

まずそれらに関わる情報がとれ、そして適切な分析・判断ができて、初めて正しい行動ができるわけです。情報センスのない人間に、それは絶対に無理です」

「ポリテイカルな作戰がさらに増えるということは、特殊部隊が政治の中核と直結していくということもあるのでしょうか？」

「諸外国ではすでにそうなっています。たとえば、アメリカであれば、一部の特殊部隊は統合参謀本部の指揮下にはあるけれども、すでにホワイトハウスから直接の指示を受けるようになっていきますし、イギリスでも、特殊部隊は実質的には政府の統合情報委員会などと直接連絡するようになっていきます。主要国の特殊部隊はどれもそういった傾向にあります。」

今、とにかく主要国では特殊部隊の指揮系統を変えて、集約が図られています。彼らに政治の意思に近いところから直接動かせるように再編成されているのですね。」

何と言っても、正確な意思の伝達、即応出来るスピード、保全等という点でそういったことが求められているのです。つまり、世界の主要国においては、各特殊部隊はますますポリテイカルなフォースになっていく傾向にあるわけです」

元第22 SAS中隊指揮官インタビュー

「対テロ」か「伝統的特殊作戰」か

岐路に立つ「世界最強の特殊部隊」英陸軍特殊空挺部隊(SAS)

「対テロ」技能と伝統的な特殊作戰の両立は不可能だ！

テロリスト暗殺や外国ゲリラ指導も

世界でもっとも伝統ある特殊部隊のひとつであるイギリス陸軍の「特殊空挺部隊」(SAS)。「対テロ」戦闘能力はもちろん、情報活動・秘密工作にも優れていると言われるその部隊は、自他共に認める「世界最強の特殊部隊」だ。

秘密のベールに包まれているSASの実像を、元中隊指揮官だったA氏に聞いた。

「まず、Aさんの経歴について教えてください。」

「私は15年間、英国陸軍の将校として過ごしま

した。サンドハースト王立陸軍士官学校を卒業した後、パラシュート部隊に配属になり、後に英国陸軍特殊空挺部隊(SAS)の選抜試験に合格しました。SASでは6年間、第22 SASの中隊指揮官を務めました。」

私の「専門技能(侵入技能) = entry skill」は山岳戦闘でした。これは右登り、雪山登山やスキーなどで、山岳地帯や北極のような極寒地帯で戦闘するための専門的技術です。これ以外にも、HALOパラシュート降下(敵地へのパラシュート降下など)でよく見られる、高高度から低空極限まで降下してから傘を開く高度なテクニク)や、「パトロール技能」の一つとしてのスペイン語およびアラビア語の日常会話の資格を持っていました」

菅原 出

「あなたがこれまでに関わった特殊作戰とは？」

「北アイルランドにおけるSASの特殊作戰に参加し、数多くのIRA(アイルランド共和軍)のテロリストたちを捕獲する作戰に関わったほか、中東での特殊作戰にも参加しましたが、具体的なことは言えません。いまだに政治的にはセンシティブな問題が多くありますので、国の秘密を暴露するわけにはいきません」

「では、Aさんが直接参加したというのではなくて結構ですので、話せる範囲で、SASが過去に行なった特殊作戰の例を教えてください。」

「SASの過去の作戰では有名なのは、198